山後２号墳発掘調査報告書

2020

各務原市埋蔵文化財調査センター

序　文

このたび、開発工事に伴い記録保存をはかるため、山後２号墳の発掘調査を実施しました。本古墳を含む山後古墳群は、古墳時代後期に築造されたといわれています。これまで発掘調査の事例はありませんでしたが、初めて詳細な内容が明らかとなりました。

調査では、馬具や装飾付大刀をはじめとする豪華な副葬品が確認されており、被葬者の権力の大きさがうかがえます。副葬品の内容から、山後２号墳の被葬者は、山後古墳群の中でリーダー的存在であることが判明しました。この成果は、境川流域の古墳時代後期の様相を考える上で、大変貴重な資料になると思われます。

発掘調査中の古墳を見ようと、近くにある小学校の児童が見学に来ました。学校の歴史学習における教材として活かすことができたと思います。また、12 月２日に行った地元説明会では、多くの住民の皆様が参加されました。実際に石室内に入っていただき、出土した遺物に触れる機会を設けたことで、歴史を直に体感できたのではないでしょうか。

開発に伴い古墳は姿を消しますが、ここに地域の歴史を伝える文化財があったことを忘れずにいてほしいと願います。そして、本書が地域及び本市の歴史に対する理解と関心を高め、歴史を学ぶための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び本書の刊行にあたり、ご協力を賜りました関係者の皆様に、心から感謝を申し上げます。

令和２年３月

各務原市教育長　加 藤 壽 志

本文目次

第１章　序章……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査の経緯……2
　第３節　地理・歴史的環境……3

第２章　検出遺構……5
　第１節　調査の方法……5
　第２節　墳丘・外部施設……5
　第３節　横穴式石室……8

第３章　出土遺物……11
　第１節　概要……11
　第２節　須恵器……11
　第３節　金属製品……13
　第４節　玉類……16

第４章　まとめ……22
　第１節　古墳の築造年代について……22
　第２節　山後２号墳の特徴と位置付け……24
　第３節　おわりに……25

挿図目次

第１図　各務原市域と遺跡位置図
第２図　山後古墳群分布図
第３図　山後２号墳と周辺遺跡分布図
第４図　完掘測量図
第５図　墳丘・周壕土層断面図
第６図　石室実測図
第７図　遺物出土状況図
第 8 図　出土遺物実測図１
第 9 図　出土遺物実測図２
第 10 図　出土遺物実測図３
第 11 図　出土遺物実測図４
第 12 図　出土遺物実測図５
第 13 図　須恵器編年図

表目次

第１表　須恵器観察表１
第２表　須恵器観察表２
第３表　金属製品観察表
第４表　玉類観察表
第５表　後期古墳時代須恵器編年対照表
　　（渡邉試案）

写真図版

図版１
１．完掘状況（俯瞰）
２．完掘状況（西から）

図版２
１．調査前風景（北東から）
２．横穴式石室完掘状況（東から）
３．玄室礫床検出状況（東から）
４．玄室礫床検出状況（南から）
５．周壕土層断面（南西から）
６．周壕土層断面（南東から）
７．外護列石検出状況（南西から）
８．勾玉・鉄鏃出土状況（北から）

図版３
１．馬具出土状況（南西から）
２．前庭部須恵器出土状況（北東から）
３．前庭部須恵器出土状況（北から）
４．玄室掘方検出状況（東から）
５．墳丘土層断面（北西から）
６．墳丘土層断面（南西から）
７．玄室掘方土層断面（西から）
８．玄室拡張区礫床検出状況（南から）

図版４
１．前庭部掘方土層断面（南西から）
２．前庭部掘方完掘状況（西から）
３．前庭部北側壁（南から）
４．前庭部南側壁（北から）
５．玄室北側壁（南から）
６．玄室南側壁（北から）
７．職場体験状況（11 月）
８．地元説明会（12 月）

図版５
出土遺物写真１（１～11・14）

図版６
出土遺物写真２（12・13）

図版７
出土遺物写真３（15～20）

図版８
出土遺物写真４（21～26）

図版９
出土遺物写真５（27～42）

図版 10
出土遺物写真６（43～51）

図版 11
出土遺物写真７（52～120）

例　言

1．本書は、岐阜県各務原市那加山後町 157 番地外 5 筆に所在する山後 2 号墳の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、宅地造成に伴う事前調査として、各務原市教育委員会埋蔵文化財調査センターが平成 30 年 10 月 8 日から 11 月 18 日にかけて行った。

3．発掘調査は、以下の体制で実施した。

平成 30 年度（発掘調査）

事務局　各務原市教育委員会　教育長　加藤壽志
事務局長　尾関　浩
次長　横山直樹
次長　広瀬明美
文化財課　課長　西村勝広
埋蔵文化財調査センター　所長　戸﨑憲一
主幹　林　武彦
主任主事　大橋直樹
（発掘担当）　学芸主事　近藤美穂

令和元年度（整理作業・報告書刊行）

事務局　各務原市教育委員会　教育長　加藤壽志
事務局長　横山直樹
次長　広瀬明美
次長　永井　聡
文化財課　課長　西村勝広
埋蔵文化財調査センター　所長　戸﨑憲一
主幹　林　武彦
主任主事　大橋直樹
（整理・報告書担当）　学芸主事　近藤美穂
嘱託職員　村瀬美香子
臨時職員　白木明美　伊藤由美　丹羽和代　梶野恭子
小酒井ひとみ　飯田まりな　中平祥子

4．調査支援として、現場作業員は公益社団法人岐阜県シルバー人材センター連合会に、遺構測量及び図化作業は株式会社イビソクに委託した。

５．出土遺物の整理作業は各務原市埋蔵文化財調査センターで行った。

洗浄・注記：丹羽　中平

遺物実測図化：西村　白木　丹羽　中平

遺物実測図デジタルトレース：西村　白木

遺物写真撮影：近藤　丹羽

実測図・写真図版レイアウト：近藤　白木

遺構図編集：近藤

本文執筆

第１章　第１節：西村

第１章　第２・３節：近藤

第２章：近藤

第３章：近藤

第４章：近藤

6. 土色注記の土色は『新版　標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編　日本色研事業株式会社　1994 年）を用い、基準とした。

7. 発掘調査及び報告書の作成にあたって、次の方々から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する。（敬称略・五十音順）

小川貴司・田中弘志・森島一貴・横幕大祐・渡邉博人

8. 出土品及び調査記録類は各務原市埋蔵文化財調査センターにて保管している。

第１章　序章

第１節　調査に至る経緯

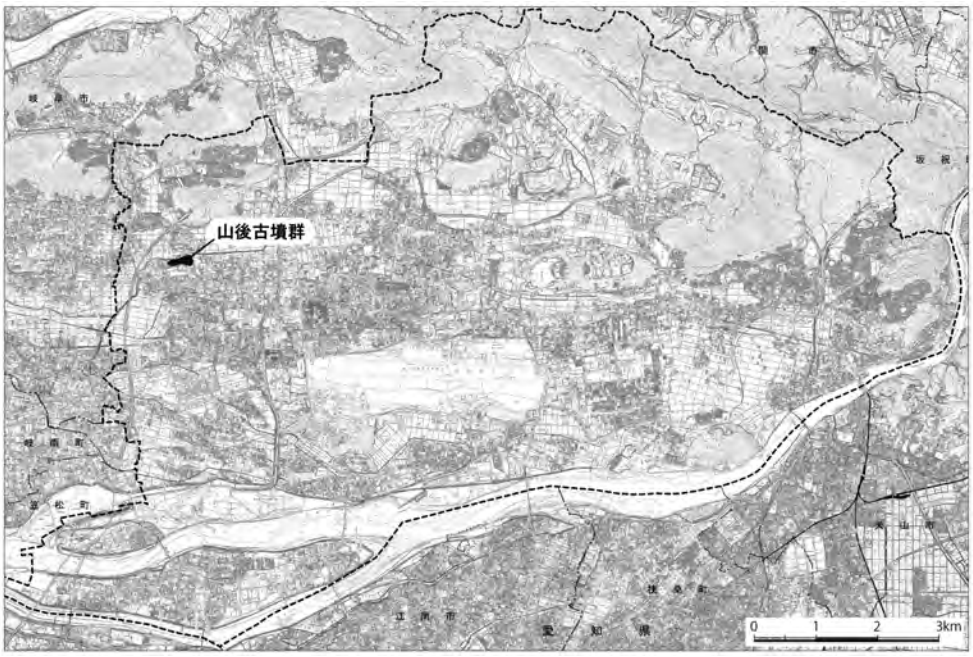
平成30年1月30日、株式会社エサキホームより各務原市教育委員会事務局文化財課へ、那加山後町157番地外5筆（1,916㎡）について、埋蔵文化財包蔵地の照会があった。当該地は山後古墳群の範囲内で、かつ2号墳の墳丘が現況確認できるため、予定されている宅地造成工事の前に、それらの取扱いについて事前協議が必要である旨を説明した。そして同日、古墳群の広がりや残存状況を把握するための試掘調査申請書が提出された。

当該地は竹藪であったためトレンチ位置周辺を伐採し、2月7日～9日の期間に試掘調査を実施した。その結果、2号墳以外の遺構は確認されなかったが、2号墳については墳丘の外護列石と周壕の残存を確認した。また、墳丘は既に半壊しているものの、石室の大部分は残存している可能性が高いと判断された。

同年2月15日・2月27日、試掘調査の結果を踏まえ、両者で埋蔵文化財取り扱いの事前協議を行った。予定されている宅地造成工事の工法では、2号墳を現状保存することは困難であり、設計変更も不可能と結論づけられたことから、2号墳を中心とする450㎡を発掘調査によって記録保存することとし、その経費については事業者が負担することで合意した。発掘調査及び宅地造成工事は翌年度に予定されたが、当初予算へ計上する時期を過ぎていたため、翌年度の6月補正予算で対応した。

その後、本市の開発審査を経て事業計画が具体的となった平成30年9月20日、株式会社エサキホームより文化財保護法第93条第1項に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」が提出され、市の所見を付して県へ進達（30各教文第178号の2　平成30年9月25日）、これを受けて岐阜県教育委員会より本発掘調査を実施するよう指導を受けた（文伝第83号の471　平成30年10月1日）。

発掘調査は、市埋蔵文化財調査センターが担当した。10月11日に着手し、その旨を文化財保護法第99条第1項に基づき県へ報告した（30各教文第214号　平成30年10月30日）。全ての現場作業は、11月18日に完了した。



第１図　各務原市域と遺跡位置図（1/120,000）

第２節　調査の経緯

発掘調査は、短期調査となるため、石室の調査を優先的に行い、墳丘範囲および構築方法については墳丘を断ち割り、土層断面の観察により情報を得ることとした。

平成30年10月８日から発掘調査の準備を行い、11日から開始した。調査後、宅地造成工事が実施されるため埋め戻しは行わず、11月18日に調査を完了した。12月２日には地元自治会からの要望により、地元住民に向けた現地説明会を開催した。

調査日誌抄

10月８日　発掘調査準備。作業道具の搬入、テントの搬入・設営。

10月10日　墳丘周辺の竹木の伐採。

10月11日　作業員を投入し、竹根と腐葉土の除去を行う。

10月17日　石室の位置を確認するため、墳頂中央から墳裾にかけて徐々に掘り下げを行い、プランの検出を行う。西側の墳裾では、外護列石を検出。

10月20日　石室がまだ確認できていないため、墳頂中央の掘削を継続して行う。石室を想定していた範囲から石列を確認。石室の側壁と推定。

10月25日　石室内の埋土掘削を行い、石室全体の検出を進める。側壁は、西側の墳裾に向かって続いているため、開口部は西に向いていると推定。墳丘の東側では、奥壁の検出を進める。

10月26日　墳丘の東側では側壁が確認されていないため掘削を続ける。西側の墳裾では、外護列石が石室開口部から続いている状況を確認。
中央中学校の職場体験を実施。４名の中学生が発掘調査を体験。

10月29日　石室内にある大型の竹根及び木根を重機により除去。根に絡まって須恵器の高坏が出土。

10月30日　石室内の埋土掘削を続け、床面の検出を進める。前庭部から、須恵器がまとまって出土。

11月１日　石室の東側を道路付近まで掘削し、奥壁の検出を進めるが、確認できず。
蘇原中学校の職場体験を実施。４名の中学生が発掘調査を体験。

11月２日　石室内の床面を検出。玄室の礫床を確認。玄室から、須恵器・勾玉・ガラス玉・馬具が出土。玉類を確認するため、埋土をふるいにかける。那加第一小学校６年生が現場を見学。

11月６日　礫床の検出。刀子及び鉄鏃が出土。小川貴司氏が現場視察。

11月13日　石室の床面検出が完了。遺物出土状況の撮影。

11月14日　ドローンによる完掘写真撮影及び遺構測量を実施。

11月15日　玄室礫床の除去。埋土をふるいにかけたところ、ガラス玉が出土。前庭部の排水溝とみられる落ち込みの埋土掘削。

11月16日　奥壁確認のため、石室と道路の境を部分的に掘削。墳丘盛土の土層確認のため、石室の南側に南北方向の断ち割りトレンチの掘削。

11月17日　トレンチの分層・写真撮影。関市役所より田中弘志氏、森島一貴氏が現場視察。

11月18日　トレンチの土層断面実測。現場撤収。

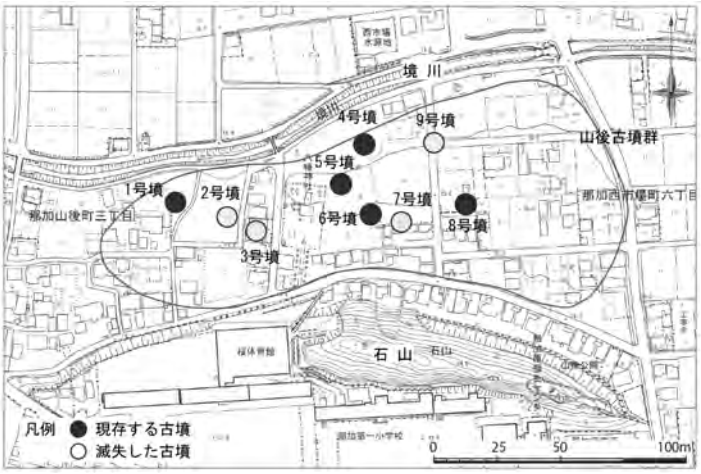
12月２日　地元説明会の開催。約70名の方が参加。

第３節　地理・歴史的環境

各務原市は岐阜県の中南部、濃尾平野の北東部に位置する。市の南部には愛知県との県境となる木曽川が流れ、北部には岐阜市や関市との境をなす権現山・向山・金毘羅山などの山が連なる。

本書で報告する山後２号墳は、那加山後町に所在し、地理的には各務原台地北西部に位置する。那加地区は、北部に三峰山や権現山など標高 200m前後の山が連なり、土山・柄山等の独立丘陵が点在する。また、境川が西流しており低湿地が広がる。山後２号墳は、境川左岸の微高地上、独立丘陵である石山の北側に分布する山後古墳群に属する。

本市には、かつて 600 基を超える古墳が分布していたといわれている。しかし、近代以降の山林開発や宅地造成、土地改良工事等によって多くの古墳が滅失しており、現存する古墳は約 150 基と推定される。



第２図　山後古墳群分布図（1/3,000）

山後古墳群は、古墳時代後期に築造されており、属する基数については、資料によって異なっている。まず、小川栄一氏の『稲葉郡古墳調書二』(1) では８基の古墳が確認されているが、岐阜県教育委員会が発行した『岐阜県遺跡地図』(2) や『改訂版　岐阜県遺跡地図』(3) では 12 基の認識である。さらに、各務原市教育委員会が発行した『各務原市史』(4) や『岐阜県各務原市遺跡詳細分布調査報告書』(5) では９基と記載されており、これまで情報の統一がされていなかった。そのため、今回の調査にあたり資料を整理した結果、山後古墳群は最低９基で構成されたとし、今回の発掘対象となった円墳を２号墳に位置づけた（第２図）。

山後古墳群の位置する那加地区では、他にも多くの古墳が築造されている（第３図）。まず挙げられるのは墳長約 82mの前方後円墳の柄山古墳である。市北西部にある柄山丘陵の山頂に立地する。発掘調査は行われていないため詳細は不明であるが、現況から前方部２段、後円部３段の築成と推定される。後円部の墳裾から葺石が確認されている。後円部に比べて前方部が小さくなっており、やや撥形を呈する。遺物は鶏頭埴輪の頭部が出土しており、築造年代は４世紀後半と推定される。

柄山古墳から西方約 400mには同じく前方後円墳である南塚古墳が存在していた。市西北部を南流する轟川左岸の下位段丘に立地する。墳長は約 85mで、５世紀代に築造されたと推定されるが、現在は滅失している。

山後２号墳の周辺には、古墳時代後期の群集墳も築造されている。南西には石山の南西側に立地する山日向古墳群が位置している。14 基の円墳が確認されているが、現存する古墳は４基である。そのうち２基は横穴式石室を有しているが、残りの２基については詳細が不明である。

土山の南麓および平地に立地する土山南古墳群は、17 基の古墳が確認されていたが、現在はすべて滅失している。いずれも直径８～11mの円墳で主体部は横穴式石室と推定される。

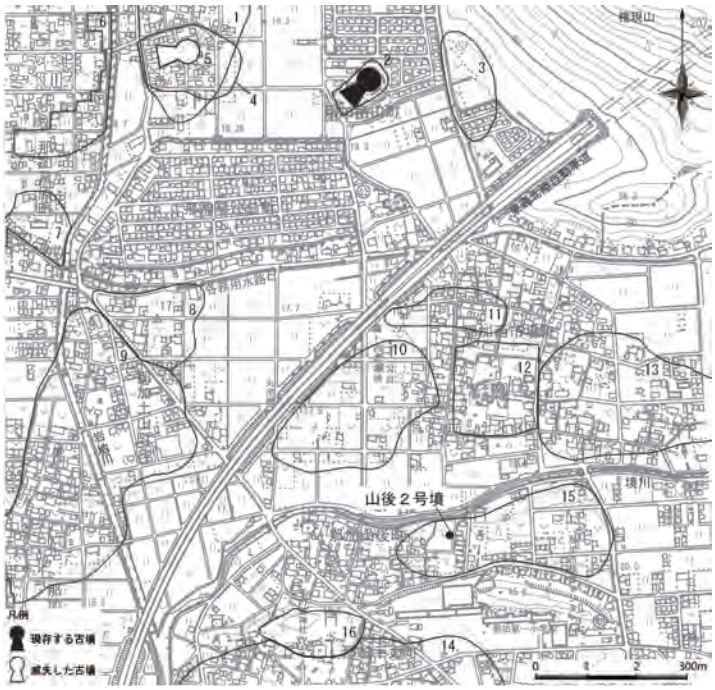
那加西市場町の新境川右岸の下位段丘に立地する西市場古墳群は、すべて滅失している。墳丘はいずれも直径約９ｍの円墳とされる。主体部は不明で、６世紀後半から７世紀初頭に築造されたと推定される。

南塚古墳群は、轟川左岸の下位段丘の南端部に立地し、南塚古墳を含む３基からなる古墳群である。直径約９ｍとされる２基の円墳が確認されているが、現在は滅失している。

古墳以外の遺跡では、轟川沿いの下位段丘に立地する桐野遺跡と芦原遺跡がある。また、芦原遺跡の南側には神田遺跡があり、これらの遺跡からは旧石器時代からの遺物が確認されている。神田遺跡では、平成 30 年度に行った試掘調査から、縄文時代中期後葉の竪穴住居跡が１基確認されており、集落が広がっていた可能性が考えられる。

他にも、柄山遺跡・西市場遺跡・西市場東遺跡・石山西遺跡・岩地遺跡が所在している。西市場遺跡及び石山西遺跡では弥生土器が確認されており、古墳時代に先行する集落の存在が考えられる。

以上のように、那加地区には多くの遺跡が確認されているが、詳細な内容は明らかとなっていない。中でも古墳は、その多くが滅失し、集落遺跡も確認されていないため、古墳時代の様相は定かではない。しかし、古墳の築造は、その生産基盤となる集落が成立していたことを示唆しており、今後の調査で確認される可能性がある。



番号	遺跡名	時代
1	桐野遺跡	旧石器～中世
2	柄山古墳	古墳
3	柄山遺跡	縄文、弥生、古墳
4	南塚古墳群	古墳
5	南塚古墳	古墳
6	芦原遺跡	旧石器～近世
7	神田遺跡	旧石器～近世
8	土山南古墳群	古墳
9	岩地遺跡	奈良～近世
10	西市場遺跡	弥生～近世
11	西市場古墳群	古墳
12	徳山更木陣屋屋敷	近世
13	西市場東遺跡	古墳～近世
14	石山西古墳	弥生～中世
15	山後古墳群	古墳
16	山日向古墳群	古墳

第３図　山後２号墳と周辺遺跡分布図（1/15,000）

註

（1）小川栄一　「稲羽郡古墳調書二」『岐阜県師範学校郷土研究資料』　1931 年

（2）岐阜県教育委員会　『岐阜県遺跡地図』p.32　1976年

（3）岐阜県教育委員会　『改訂版　岐阜県遺跡地図』pp.44・45　1990年

（4）各務原市教育委員会　『各務原市史　考古・民俗編』pp.303～305　1983 年

（5）各務原市教育委員会　『岐阜県各務原市遺跡詳細分布調査報告書』p.79　1998 年

第２章　検出遺構

第１節　調査の方法

山後２号墳は、境川左岸の微高地上に立地しており、墳丘の南側からやや低い地形となっている。調査前は竹林により覆われていたが、盛土の起伏が良く観察でき、東側に隣接する道路により半分程度が削平されている様子が確認できた。また、墳丘南側においても、後世に掘削された東西方向の溝が通っており、その影響が墳丘にまで及んでいる可能性が推定された。墳丘北側では、墳頂からの傾斜がなだらかになっているため、削平を受けているものと考えられる。

墳丘は竹根が繁茂しており表土は撹拌されている。墳丘の検出だけでもかなり時間が削られてしまうため、石室を中心に発掘調査を実施した。石室の調査完了後、墳丘の範囲及び盛土の堆積状況を確認するために、石室の主軸ラインと直交する南北方向の断ち割りトレンチを設定し、土層断面の観察を行った。

墳丘西側で行った試掘調査のトレンチは埋め戻しをしていたが、周壕の範囲確認及び土層断面を確認するため、再度掘削した。

第２節　墳丘・外部施設

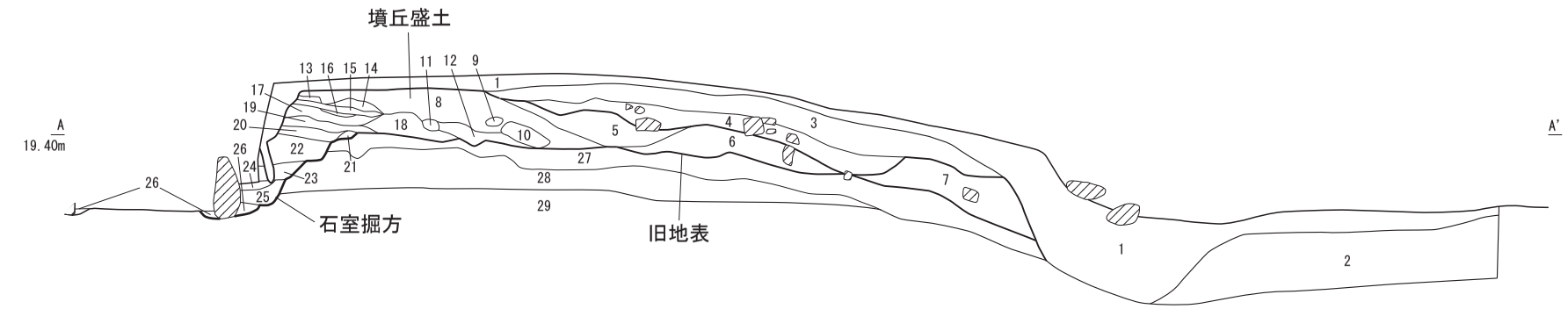
墳丘は、断ち割りトレンチや現況地形から、直径約 16ｍの規模であると推定される。現況で石室床面から約 1.2ｍの高さを測るが、後世に削平されているとみられ、従来の高さではないと推定される。トレンチの土層断面から、墳丘は旧地形を利用して造られていることが明らかとなった。整地した様子はなく、当時の地表面に直接土を盛って墳丘を構築している。石室は、地山を掘り込んで造られている。側壁と墳丘の隙間には版築状に土を充填して裏込めとしている。

墳丘の西側では、試掘調査のトレンチを設定しており、外護列石を確認した。石室開口部の側壁から連続的に配置されており、北側に約 1.7ｍ、南側に約 2.9ｍの範囲で列石を確認した。しかし、それ以上、調査区を拡張していないため、墳丘を巡るように配されていたのかは不明である。断ち割りトレンチでは後世の溝により墳丘が削平されており、確認はできなかった。現状で最大３段目までの石が残存しているが、築造当時はどこまで積まれていたのか明確ではない。石材は全てチャートを使用しており、大きさは 10 ㎝～30 ㎝を測る。列石の基底面は、標高約 19.74ｍと一定の高さに据えられている。黄褐色土の地山直上から積み上げられているが、積み方に規則性は認められない。

石室南側の墳丘上では、列石の一部と思われる３個の石を確認した。石室側壁から連続的に配置され、外護列石と同じような弧状を描いている。墳丘構造の一部である可能性があるが、墳丘の削平に伴い壊されていると考えられる。本来は、外護列石のように継続して据えられていたものと推定される。

周壕は、試掘トレンチから確認された。幅約 4.3ｍ、地山からの深さ約 0.4ｍの規模で、直径は約 24ｍと推定される。墳丘南側の断ち割りトレンチでは、周壕は確認できていない。試掘トレンチの周壕底面の標高が約 18.4ｍに対し、墳丘南側にある後世の溝の底面の標高は約 17.9ｍを測るため、周壕は壊されていると考えられる。

第４図　完掘測量図

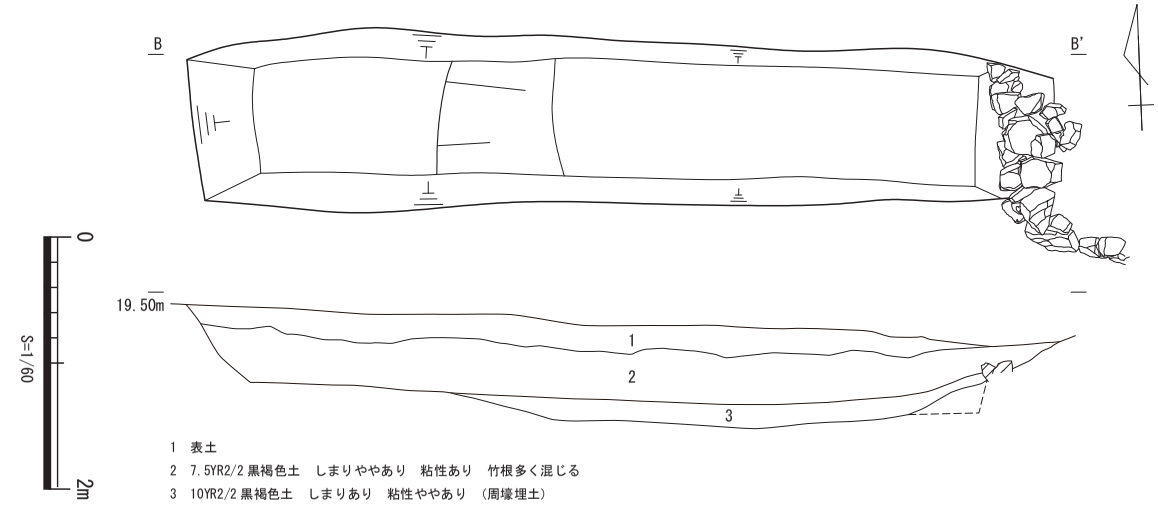


1　表土
2　7.5YR2/2 黒褐色土　しまりややあり　粘性あり　褐色土ブロック多く混じる　竹根多く混じる
3　10YR2/2 黒褐色土　しまりあり　粘性ややあり　竹根多く混じる
4　10YR2/1 黒色土　しまりよわい　粘性あり　5 ～ 20 cmの礫混じる

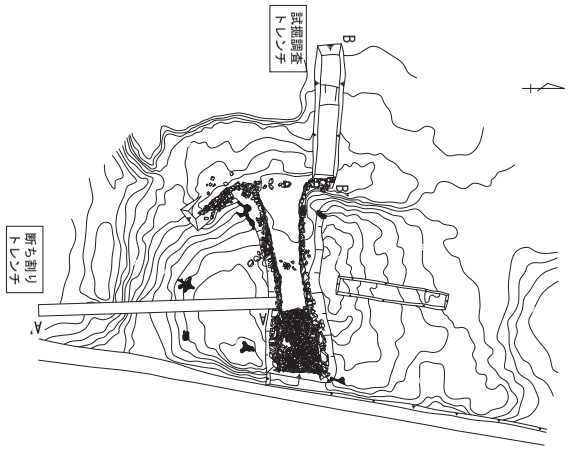
墳丘盛土
5　7.5YR2/1 黒色土　しまりあり　粘性あり
6　10YR2/2 黒褐色土　しまりあり　粘性あり
7　10YR2/1 黒色土　しまりあり　粘性あり
8　10YR2/1 黒色土　しまりあり　粘性あり
9　10YR3/3 暗褐色土　しまりややあり　粘性あり
10　10YR3/3 暗褐色土　しまりあり　粘性あり　黒褐色土やや混じる
11　10YR3/3 暗褐色土　しまりややあり　粘性あり　黒褐色土混じる
12　10YR2/2 黒褐色土　しまりあり　粘性あり　暗褐色土やや混じる

石室掘方埋土
13　10YR2/3 黒褐色土　しまりあり　粘性あり　暗褐色土混じる
14　10YR2/2 黒褐色土　しまりあり　粘性あり　暗褐色土混じる
15　7.5YR2/1 黒色土　しまりあり　粘性あり　暗褐色土ブロックやや混じる
16　10YR2/2 黒褐色土　しまりややあり　粘性あり
17　10YR2/1 黒色土　しまりあり　粘性あり　暗褐色土やや混じる
18　10YR3/3 暗褐色土　しまりあり　粘性あり　暗褐色土ブロック混じる
19　10YR2/2 黒褐色土　しまりあり　粘性あり　褐色土混じる
20　10YR2/1 黒色土　しまりあり　粘性あり　暗褐色土ブロックやや混じる
21　10YR2/2 黒褐色土　しまりややあり　粘性あり　暗褐色土多く混じる
22　10YR3/3 暗褐色土　しまりややつよい　粘性あり　黒褐色土多く混じる
23　10YR2/1 黒色土　しまりあり　粘性あり　褐色土混じる
24　10YR2/2 黒褐色土　しまりあり　粘性あり　褐色土多く混じる
25　10YR2/1 黒色土　しまりあり　粘性あり
26　10YR2/2 黒褐色土　しまりあり　粘性あり　褐色土混じる

地山
27　10YR2/1 黒色土　しまりあり　粘性あり
28　10YR2/1 黒色土　しまりあり　粘性あり
29　10YR5/4 にぶい黄褐色土　しまりあり　粘性あり



1　表土
2　7.5YR2/2 黒褐色土　しまりややあり　粘性あり　竹根多く混じる
3　10YR2/2 黒褐色土　しまりあり　粘性ややあり　（周壕埋土）



第5図　墳丘・周壕土層断面図

第３節　横穴式石室

山後２号墳の石室は、西方向に開口する無袖式石室である。天井石は持ち去られており、石室内には土が堆積していた。側壁の石は多くが崩落しており、残存状況は良くない。石室は玄室・羨道部・前庭部の構造が確認された。墳丘東側を通る道路により奥壁は破壊されているため、石室の本来の全長は不明であるが、残存長は約 9.6ｍを測る。

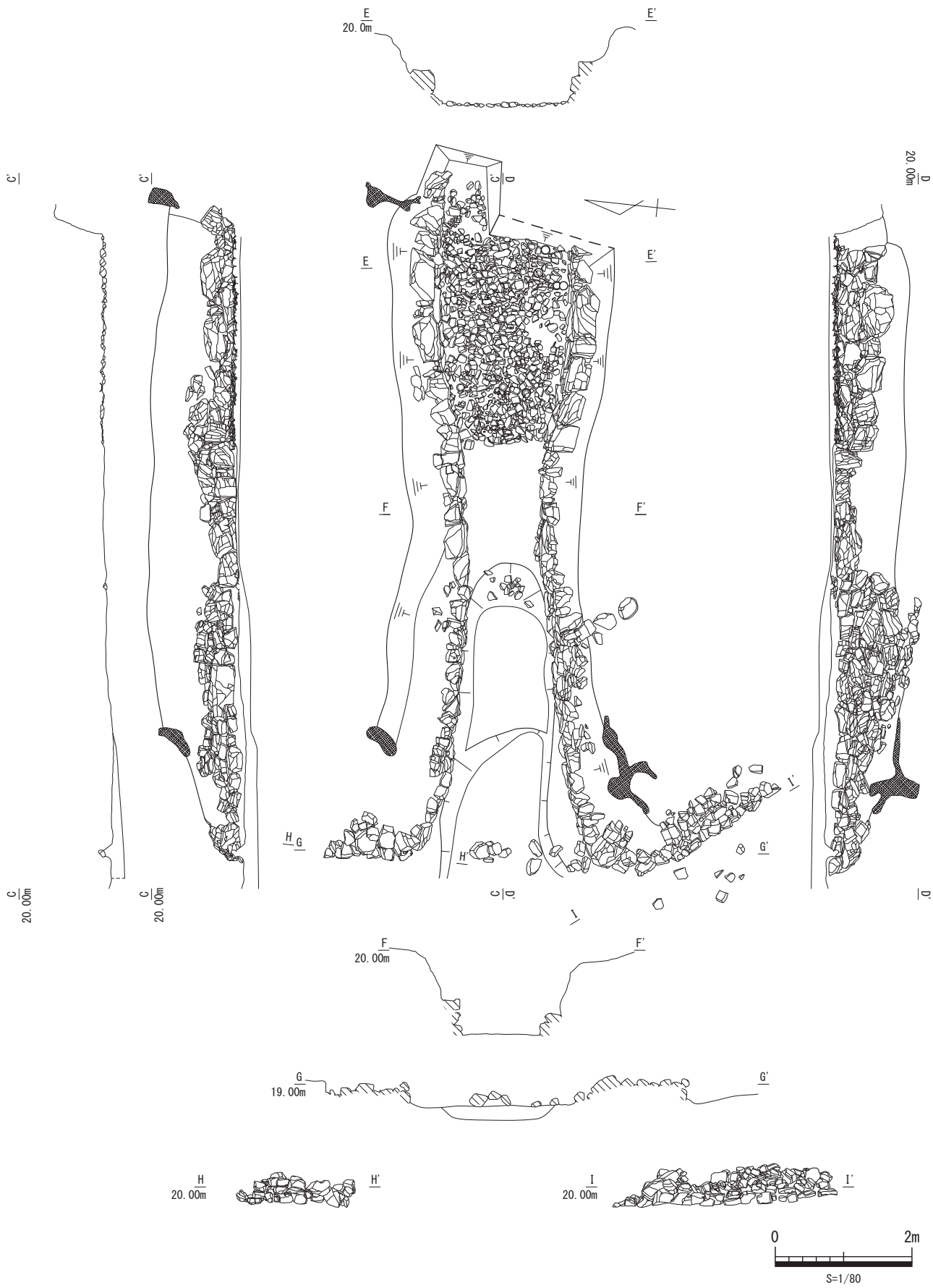
玄室の平面形は胴張の長方形で、残存長約 3.5ｍ、最大幅約 1.8ｍ、最小幅約 1.2ｍを測り、羨道に向けて幅が狭くなる。側壁の崩落は激しく、残存する石積みは２段である。石材は全てチャートを使用しており、長軸を横にして積み上げる。石材の大きさは 30 ㎝～70 ㎝と幅が広く不揃いであるが、小さい石材を使用する場合は、数個を積み上げて１段の高さを揃えている。床には大きさ約 5～15 ㎝の角礫を貼り、礫床としている。玄室内から出土した遺物は、礫床直上から確認された。

羨道は長さ約 2ｍ、幅約 1ｍを測る。側壁の崩落は激しく、残存する石積みは１段であり、一部２段目が確認された。石材はチャートで、玄室と同様に長軸を横にして使用している。右側壁の玄室と羨道の境にあたる玄門部には、目地を遮るように縦方向に据えられた立石が確認された。規模は長軸約 40 ㎝、短軸約 24 ㎝を測る。石室の内側に出張る状態ではなく、袖というより玄室と羨道部を区画する役割であると推定される。

羨道の床面には、礫床から羨道部の境に 30～40 ㎝の方形や長方形を呈する石材が据えられていた。調査中に崩落石とみなし取り外してしまったが、玄室と羨道部を区画した梱石であった可能性がある。

前庭部は長さ約 4.1ｍを測る。開口部に向かって「ハ」の字状に広がっており、最小幅約 1ｍ、最大幅約 2.8ｍを測る。側壁の石材は、玄室や羨道部よりも小さく、前庭部と玄室・羨道部とを明確に区画している。現状で４段の石積みが確認されたが、石材の大きさに違いがあるため、小さい石材を使用する場合は数個を積み上げて１段分としている。

石室の床面は玄室から前庭部まで概ね水平を保っている。玄室では礫床直下に黄褐色土の地山を検出した。前庭部では、側壁の間に開口部に向かって深くなり、「ハ」の字状に広がる溝状の掘り込みを検出した。前庭部に掘られた溝の用途としては、排水が考えられる。排水溝が造られる事例は確認されているが、概ね細長い形状をしている。山後２号墳の溝は、前庭部と同じ幅に造られており、形状が全く異なっているため、別の用途の可能性もある。


E
20.0m
E'
C'
C'
C
D
D
20.00m
E
E'
F
F'
H
G
H'
G'
I'
C
20.00m
C
20.00m
C
D
D'
I
F
20.00m
F'
G
19.00m
G'
H
20.00m
H'
I
20.00m
I'
0
2m
S=1/80

第 6 図　石室実測図

第７図　遺物出土状況図